



豚枝肉取引規格における枝肉重量改定について

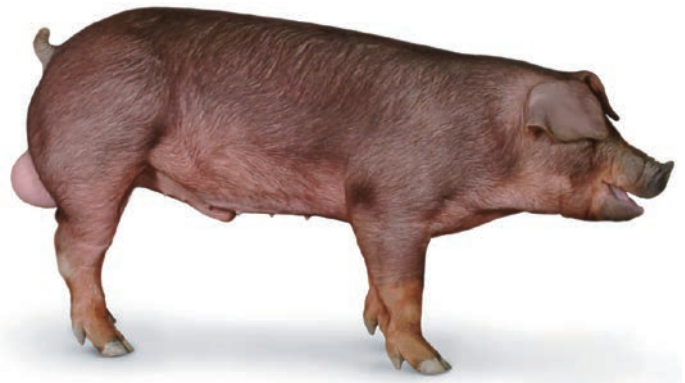
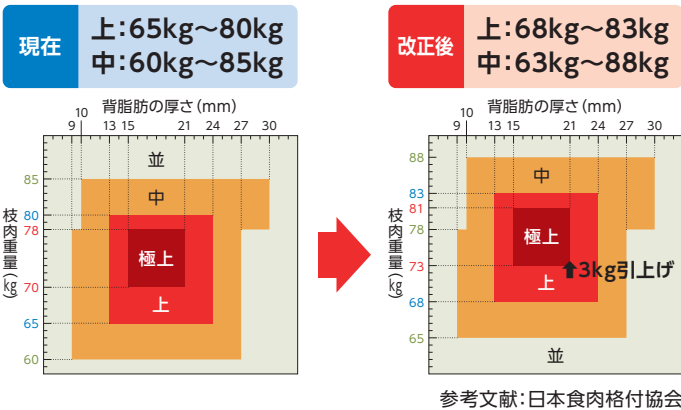
REPORT

図1 枝肉重量改定について

図2 PIC®800(デュロック種)

枝肉重量規格改定の概要

- 上限・下限ともに+3kg(背脂肪の変更はなし)
- 2023年1月1日から施行

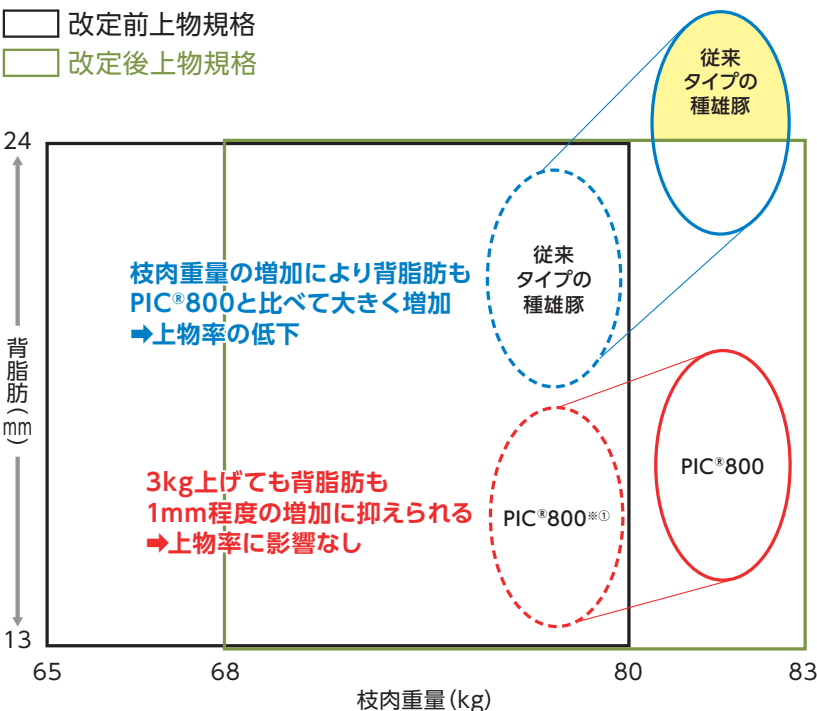


参考文献: 日本食肉格付協会

公益社団法人日本食肉格付協会は、豚枝肉取引規格の各等級の枝肉重量を2023年1月1日より上限・下限ともに3kgずつ引上げるとの発表を行いました。この改定は1996年8月以来26年ぶりとなり、豚枝肉取引において収益に大きな影響を与えるものとなります。背脂肪については変更無く、上物規格は68~83kg、中物規格は63~88kgの範囲となります【参照:図1】。3kgの枝肉重量引上げにより、背脂肪への大きな影響が考えられます。一般的に枝肉重量が増加すると背脂肪も増加する(厚くなる)と考えられるため何らかの対策が必要となることが予想されます。今回の規格改定により弊社種雄豚【参照:図2】がどのようにコスト削減や付加価値向上に寄与できるのかを解説いたします。

図3 PIC®800が持つ能力①

- 改定前上物規格
- 改定後上物規格



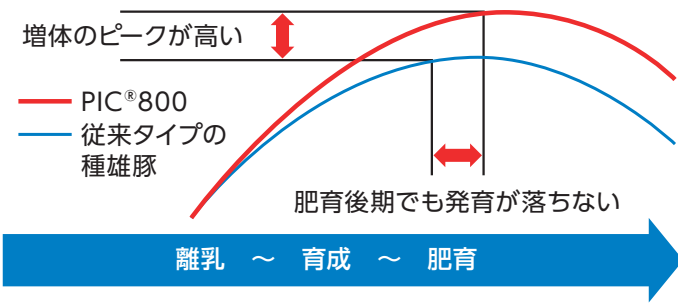
【図3】では、上物規格の改定前と改定後での肉豚枝肉重量に応じた背脂肪の変化予測について、PIC®800由来と従来タイプの雄由来の肉豚で比較しています。PIC®800由来の肉豚の枝肉重量が3kg増加した場合、背脂肪は約1mm厚くなると推測しており、従来タイプの種雄豚では1mm以上厚くなると推測しています。弊社のPIC®800と比較すると1mm以上の差が生じる可能性があります。分布位置を比較すると従来タイプの種雄豚由来の肉豚では規格外となる割合が高まることと予想されます【参照:図3】。PIC®800においては改定前と改定後で分布位置が変化していますが、改定後であっても範囲は上物規格内にしっかり収まっています【参照:図3】。

従来タイプの種雄豚は枝肉重量増加に伴い背脂肪がより厚くなり、範囲が上物規格内に収まらなくなるため上物率が減少してしまいます。しかしPIC®800では上物規格内に改定後も収まるため、上物率を維持したまま枝肉重量を3kg引上げることができます。

※①: 日本国内PIC®800♂×ケンボロー®♀使用農場Aの2022年2月実績の平均値

図4 PIC®800が持つ能力②

■PIC®800と他社の発育カーブの差 ※イメージ



**PIC社の発育カーブに基づく
120~125kgの期間増体は約910g
PIC®800であれば5日で生体体重5kgUP!!**

肉豚の生涯平均増体量は、生体重量約120kgまでが増体のピークとされています。枝肉重量を3kg増加させるためには生体重量で約4.6kg（歩留まり65%で算出）増加させる必要があります、改定後は約125kgまで生体重量を増加させなければなりません。そうした場合従来タイプの種雄豚では、肥育後期で発育が低下する傾向があります【参照:図4】。一方のPIC®800由来の肉豚は、PIC社の発育カーブに基づく現在（生体重量が120kg）より、改定後（生体重量125kg）の生体重量で出荷した方が生涯平均増体量は約20g/日増加します【参照:図5】。さらに生体重量120~125kgの期間の増体量は約910g/日であるため約5日で5kgの増体を達成することが出来ます【参照:図4】。

また農場飼料要求率を比較すると、PIC®800由来の肉豚は2.69、従来タイプの種雄豚では3.10となり0.41の差があります。肉豚1頭当りの飼料コスト差を計算すると、3,588円/頭^{※④}に相当し、飼料価格が高騰している現在においてこの価格差は農場の生産コストに大きな影響を与えます。

今までより飼養期間を約5日間延長するためには、現状の生産フロー・飼養面積・農場のヘルスステータスなどを確認し、必要に応じて生産フローの変更や給餌器・給水器の数を増設する必要があります。規格改定にあたりご質問等ございましたら、弊社までお気軽にご相談ください。

※④:飼料単価70円/kg、出荷体重125kg時の価格差

図5 PIC®800が持つ能力③

	PIC®800	従来タイプの種雄豚
生涯平均増体量（現在）	762g/日 ^{※②}	680g/日
生涯平均増体量（~125kg）	786g/日 ^{※③}	-
農場飼料要求率	2.69	3.10

※②:日本国内PIC®800メケンボロー®♀使用農場Aの2021年実績値（平均118kg出荷）

※③:PIC社の発育カーブに基づく推定値

東北農場リニューアル

HOT NEWS

図6 東北農場 外観



図7 東北農場 豚舎内



東北農場は1982年に開設し今年40年の節目にリニューアルを行うことができました。弊社の原々種豚農場であり、岩手県気仙郡住田町に位置しています。総母豚規模1,300頭、毎年PIC社から輸入される最新の遺伝子を日本国内向けに改良し、増殖してケンボローユーザーの元へ優秀な種豚の供給を行っています。設備として空調制御装置であるマキシマス、ナノカーボンシートを採用した床暖房マット、自動洗浄機やフラッシングシステムなど弊社の最新技術を各所に取り入れました。弊社ではお客様へのハイヘルスな種豚供給を行う為、厳しい防疫基準を採用しています。リニューアル後もより一層の防疫体制を維持しつつ、お客様に品質の高いハイヘルスな種豚を安定的に供給することに努めてまいります。

図8 PIC社 60年の歴史



10月の4日と5日の2日間で、米国テネシー州のナッシュビルにおいてPICシンポジウム2022が開催されました。今回のシンポジウムはPIC社創立60周年の記念シンポジウムで新型コロナウイルス(COVID-19)の影響により4年ぶりに開催されたこともあり、全世界より400名を超える関係者が参集しました。PIC社のCOOのBill ChristiansonからPIC社の60年の歩みについて始めに説明がありました【参照:図8】。創業当時である1962年の生産成績は一母豚当りの年間生体出荷重量が1,770kgでしたが、2022年の現在では約4,200kgと2.4倍の量が生産できるまでに改良が進んでいます。一方、全世界に打撃を与えた新型コロナウイルスの影響やウクライナ情勢に起因する飼料穀物価格の高騰、インフレ、労働力確保、環境負荷低減に到るまで、喫緊の課題に関して、経済アナリスト、大手養豚会社より様々な視点から講演が行われました。終演に当たりPIC社遺伝改良の将来について、画像解析技術を利用した種豚の四肢の改良などの最新技術と10年後また次の60年後の遺伝改良予測が発表されました。

遺伝改良傾向

【PIC社の最新遺伝改良推移と目標】

PIC社は世界規模で最新の改良技術を駆使して、遺伝改良を飛躍的に進めています。図9は、この先10年の各遺伝改良形質における予測推移です。2032年には一母豚当りの離乳頭数が年間1.2頭改善し45.5頭を達成すると推測しています。また、離乳舎以降の農場飼料要求率は年間0.036改善し2.14に達するとしています。哺育能力の改善や事故率の低下により出荷率(%)は、年間0.38%改善し97.0%になると予測しています。

政治、戦争、自然災害、疾病の蔓延など不可抗力に対してPIC社は全世界に遺伝改良農場と同レベルのエリートファームを展開し、盤石な遺伝子供給体制を維持することで様々なリスクを低減し遺伝子供給能力を向上させてきました。昨今の飼料価格の高騰や不安定な世界情勢の中、より効率良く低コストで良質な豚肉生産を目指すことは必要不可欠となるでしょう。PIC社は優秀な遺伝子を皆様にお届けするために日々改良を進めています。

図9 遺伝改良傾向推移

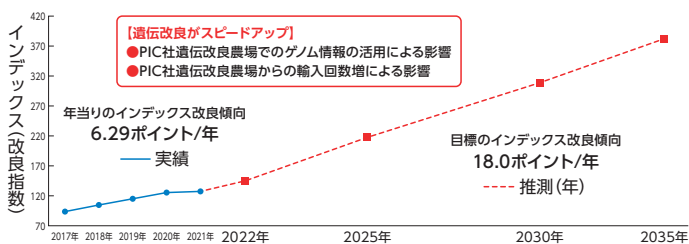
	2021年	改良傾向/年	2032年
一母豚当りの年間離乳頭数(頭)	33.5	1.2	45.5
一腹当りの離乳頭数(頭)	13.4	0.49	18.3
一母豚当りの年間離乳子豚総体重(kg)	201	8.5	286
一母豚当りの生涯離乳頭数(頭)	60.9	2.2	82.9
一母豚当りの年間生体出荷重量(kg)	4,058	198.1	6,039
出荷率(%)	93.2	0.38	97.0
平均出荷体重(kg)	130.0	1.14	141.4
農場飼料要求率	2.50	0.036	2.14

【日本国内における遺伝改良傾向予測】

弊社は毎年定期的にPIC社のエリートファームから最新の遺伝子を導入しており、世界レベルの遺伝改良の成果を日本国内のケンボローユーザーへお届けしています。弊社では毎年国内におけるケンボロー®、ケンボロー®35の実績値、インデックス推移と最新の改良傾向から1腹当りの総産子数推移を予測しています。ケンボロー®では3年後の2025年に17.82頭、13年後の2035年には21.60頭、ケンボロー®35では3年後の2025年に17.23頭、13年後の2035年には20.05頭を達成すると予測しています。

図10 ケンボロー®のインデックス推移と推測値

最新遺伝改良傾向2022年



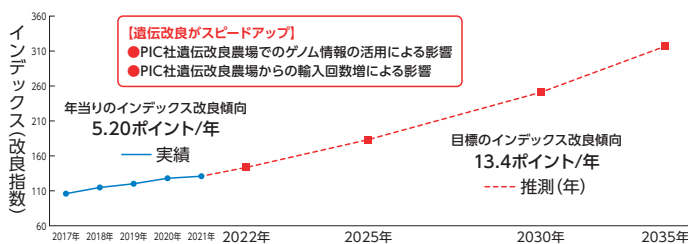
【実績と遺伝改良傾向からの推測値】

実績値と予測	2019年実績値	2020年実績値	2021年実績値	2022年推測値	2025年推測値	2030年推測値	2035年推測値
1腹当たりの総産子数	15.58※⑤	15.67※⑥	16.31※⑦	16.69	17.82	19.71	21.60
予測値	2019年予測値	2020年予測値	2021年予測値	2021年までの最新遺伝傾向による予測です			
1腹当たりの総産子数	15.49	15.86	16.00				

※⑤：日本国内ケンボロー®使用農場Aの月平均値(実績値2019年1月～2019年12月)
 ※⑥：日本国内ケンボロー®使用農場Bの月平均値(実績値2020年1月～2020年12月)
 ※⑦：日本国内ケンボロー®使用農場Cの月平均値(実績値2021年1月～2021年12月)

図11 ケンボロー®35のインデックス推移と推測値

最新遺伝改良傾向2022年



【実績と遺伝改良傾向からの推測値】

実績値と予測	2019年実績値	2020年実績値	2021年実績値	2022年推測値	2025年推測値	2030年推測値	2035年推測値
1腹当たりの総産子数	15.67※⑧	15.52※⑨	16.10※⑩	16.68	17.23	18.64	20.05
予測値	2019年予測値	2020年予測値	2021年予測値	2021年までの最新遺伝傾向による予測です			
1腹当たりの総産子数	15.92	16.16	15.77				

※⑧：日本国内ケンボロー®35使用農場Dの月平均値(実績値2019年1月～12月、2020年1月～12月)
 ※⑨：日本国内ケンボロー®35使用農場Eの月平均値(実績値2021年1月～2021年12月)

第13回ケンボロー研究会

HOT NEWS

図12 Uislei Orlando氏



図13 Ron Navales氏



11月10日に、TKPガーデンシティPREMIUM京橋にて第13回ケンボロー研究会を2年ぶりに開催しました。PIC社のグローバル栄養チームのUislei Orlando氏とRon Navales氏を講師として招きました。飼料価格高騰による飼料マーケットの現状とそれに対応するための栄養的戦略および繁殖における給餌管理の2つをテーマで講演いただきました。セミナーに関するご質問等につきましては、弊社のスタッフまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。

PIGIMPROVER

2022年 第17号 (12月1日発行)

PIC®

発行
 Licensed Producer
 and Distributor
 Camborough®

Iwatani

イワタニ・ケンボロー株式会社

本社/東京事務所 〒103-0016 東京都中央区日本橋小網町3-11 日本橋SOYICビル3階
 TEL.03-3668-5360 FAX.03-3668-5368
 札幌事務所 〒060-0908 北海道札幌市東区北8条東3-1-1 宮村ビル304号
 TEL.011-807-8261 FAX.011-807-8262
 東北事務所 〒020-0874 岩手県盛岡市南大通1-8-7 CFC第1ビル5階
 TEL.019-604-6888 FAX.019-626-1095
 大阪事務所 〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町3-2-14 イワタニ第二ビル2階
 TEL.06-6264-2929 FAX.06-6264-3068
 九州事務所 〒880-0806 宮崎県宮崎市広島1-18-7 大同生命宮崎ビル10階
 TEL.0985-23-5543 FAX.0985-23-5561

ホームページ



YouTube

